ニューガラス関連学会

第 20 回国際ガラス会議参加報告
――運営に携って――

日本板硝子株式会社　技術開発室　知財グループ
岸 本　正 一

Report on the 20th International Congress on Glass
—Operation of the Congress—

Shoichi Kishimoto
Intellectual Property Center, Nippon Sheet Glass Co., Ltd.

去る 9 月の最終週，第 20 回国際ガラス会議が京都国際会館にて開催された。今回は，ICG が日本で開催されたこと，また，学会運営側の一員として参画した体験から，僭越ながら報告させて頂きたいと思う。

国際ガラス会議（International Congress on Glass）は国際ガラス委員会（International Commission on Glass，略称は同じく ICG）と，開催国内組織との共同で主催される。国際ガラス委員会は，ガラスの科学と技術に特別の関心のある世界中の学会や業界団体からなる委員会で，1933 年に設立された。その目的とするところは，情報の交換の視点に立って，ガラスの芸術，歴史，教育，科学および技術に携わる全ての人々の相互理解と協力関係を促進することにある。国際ガラス委員会の理念に基づき，毎回の国際ガラス会議（以下，ICG と略記する）は，学術的成果発表の場であるのみならず，ガラスに関心を抱く研究者と技術者の意見交換の場を提供し，専門を異にする参加者の間で活発な議論や交流が行なわれている。

ICG は 3 年毎に，各国の持ち回りで開催される。日本においては，2 回目の開催であり，第 1 回目は 30 年前，今回と同じく京都国際会館で行なわれた。前回開催時には学生として参加された方々が，今回は高名な先生としてご講演されたわけで，ICG の歴史を感じさせる。

会場となった京都国際会館は，京都市の北部，自然環境に恵まれた宝ヶ池の畔に 5 万坪弱の広大な敷地に建てられている。また，京都駅から市営地下鉄 1 本で接続され，利便性が高い。さて，本館会議場は，どことなく合掌造りを感じさせる外観の建物で，40 年近く昔に竣工したとは思えないデザインである。内部は，バリアフリー化はもとより，空間を贅沢に使った広いロビーや各会議室のゆったりとした配置，バックヤードの利便性など，優れた設計になっている。設備面も，同時通訳やプロジェクタ，ネットワークシステムを初めとして非常に充実している。ただ，無理をいえば広すぎることであろう。一つの会議室に腰を据えて聴講

〒664–8520　兵庫県伊丹市鴻池字街道下一番
日本板硝子株式会社　技術開発室
TEL 072–781–0081
FAX 072–781–8864
E-mail: ShoichiKishimoto@mail.nsg.co.jp

するのは快適だが，セッションのハシゴをしようとすると，フロアプランに慣れないうちは迷子になりかけたりすることがある。

今回の ICG を支えた組織について言及したいと思う。プレジデントの京都工芸繊維大学教授　大田陸夫先生の下，産官学トップからなる日本委員会により大方針を策定，3 界実力者と主催のセラミックス協会・支援のガラス産業連合会からなり大田先生が委員長を兼務された組織委員会でその方針をブレークダウン，さらに学術委員会（委員長：京都大学化学研究所教授　横尾俊信先生）と運営委員会（委員長：京都大学工学研究科教授　平尾一之先生）に分かれ，それぞれ演者・プログラム関係など，配布物・リクリエーション関係・当日運営などを分担した。運営委員会には，会場の京都国際会館，および会議運営の専門業者として日本コンベンションサービス株式会社も加わり，運営に威力を発揮された。また，会期中は，学生アルバイト・ボランティアの方々も加わられた。

講演については，まず ICG の特徴である Industrial overview から紹介するべきであろう。このセッションは，学術的というよりはむしろ，産業技術的あるいは経営的内容になるが，ガラス産業の業界の動向を把握できる。このセッションは，開会式に引き続き，約 1700 名収容のメインホールで行なわれ，当日の荒天にも拘わらず，多くの聴衆が参加された。このセッションは 7 件の講演すべてが招待講演で，うち 3 件がディスプレイであった。ディスプレイは，近年流行の薄型平面ディスプレイとして液晶やプラズマディスプレイパネル用基板としてのガラス・ガラスセラミックスの紹介と共に，伝統的な CRT においてリサイクル技術への言及が興味深い。

また，ICG の他の特徴である，研究者と技術者の活発な意見交換については，セッションテーマによっては温度差が見受けられた。小職は主に Optoelectronics and telecommunication のセッションを聴講したが，企業関係者の聴講

写真 1　京都国際会館本館会議場全景。傾斜した外壁が印象的。

写真 2　開会式の模様（メインホール）。Industrial overview も同会場で講演された。

写真 3　典型的な会議室の例（B2 会場，収容約 200 名）

は少ないように見受けられた。いわゆるITバブルの崩壊の影響から脱していないためか，発表内容的にもどちらかというと基礎科学的な講演が多い印象である。一方，Science and Technology of Sol-GelsやSurfaces and Thin Filmsのような薄膜関係では，立ち見が出る程の盛況で質疑応答も多く，座長の方々は講演スケジュールを守るのに苦労されたようである。

日本で開催されたこともあり，学生の講演も数多く見受けられた。多くの日本人にとっては，英語での質疑応答は難易度が高いようだが，先生方の熱心なご指導よろしく，立派に講演をこなしている学生の姿も多く見受けられた。

ポスターセッションもまた，盛況なセッションの一つだった。ポスターの掲示面積は，一般的な学会の場合とほぼ同等だが，100件を大きく越える発表件数に対し，非常に多くの参加者が訪れ，群がるようにして発表者と議論を行なっていたのが印象的である。

さて，今回のICGには，9/26のReceptionから，10/1のClosing ceremonyまでの6日間にわたり，途中9/29夜には台風が近畿地方に上陸するという事態もあったが，1000名弱の方々の参加を頂き，特に混乱もなく予定通り会期を終了することができた。これは企画立案から当日運営までにかかわった全ての方々の協同と，全ての参加者のご協力の賜物と考えており，小職もその一隅に参画できたことを幸運と感じている。

以上，第20回ICGについて主に運営側の立場から列挙してきた。最後に，運営に携わった著名な先生方・斯界諸氏・スタッフの方々，ご寄付・広告を頂いた諸団体の方々，そして会議で講演・聴講・議論していただいた参加者の皆様に深い謝意を表すと共に，ガラスに携わる全ての方々の今後のご活躍・ご発展を祈ります。